

日本クリスチャン・アシュラム連盟

冬季号

開 心  
静 聴  
充 満  
献 身  
奉 仕

# 日本アシュラム

United Christian Ashrams of Japan

Winter 1976

▼連盟は創始者の祈りによって各地に生れたファミリーの全国的な交わりであつて、常に新しい家族(単位)の参加を期待している。

## “聖霊を受けよ”

大久保 進

主が、復活されて、第一に、弟子たちに言われたことは、「聖霊を受けよ」、というお言葉であった。わたしは昨今つくづくと思うことがある。それは、日本の教会が、もう一度、麻を着、灰をかむって、「聖霊を受けよ」との、主のお言葉の原点に、今こそ、立ち帰るべきだと思う。それにつけても、全国にある日本アシュラムの兄弟姉妹が、「聖霊を受けたのか」と、静かにささやく御霊の声に、真正正銘、アメンと答えられる者が何人あるであろう。聖霊を受けなければ、霊的なことは何一つできない。聖霊なしには、まことの礼拝も、力ある伝道も、祈りの手さえ高く上げることができない。

だが、聖霊の内住のあるところには、聖なる人格的な迫まりが絶えずある。それは生来の情熱とか、至誠というものではなく、キリストより賜わる、聖霊の人格がかもし出す、御霊の迫まりである。これは深層心理学も、とうてい計かりえない境地である。

聖霊の働きは「自我の全貌」を切り開き、打ち砕き、聖別する。スタンレー・ジョーンズ博士も若き日に自己の霊的貧困と、無気力に悩んだ。彼はここで、生けるキリストの前に徹底的なサレンダー(降伏)をした。ついに霊的革命は来た。その後、博士は聖霊のうつつわとして、世界の教会の霊的指導者となられた。

ジョーンズ博士の唱道されたアシュラムの五原則である、「開心、静聴、充滿、献身、奉仕」は、単なるスローガンではなく、もじどおり博士自身の、聖霊への応答であり、また、聖霊へのニード(祈求)を、最もよく現わしたものである。

この年も日本の各地において、活潑にアシュラムが展開されるであろう。そのために祈ることは、「聖霊の充滿」が、ひとりも洩れなく与えられることである。教職も信徒もへりくだって主のみ前に心を開き、主の言葉に聞きたい。開心なき魂は結局、荒野の生活四十年の迷夢に終始するであろう。みたまを消し、みたまをなみし、み霊に逆うことは、キリスト者の最大の悲惨事である。

終末の危機を思わせる現代世相に教会は、今こそ、ノアの箱舟に比すべき、十字架の福音を、大胆に語る責任がある。そのために、わたしたちひとりびとりが、三位一体の神に根ざし、聖霊にからめられ、聖霊につらぬかれ、聖霊に満たされた「その躍動」に参加すべきである。聖霊のうめきに共調して、祈るところにほんとうの伝道があり、いのちある教会の形成がある。

世に「聖会信者」なるものが、あると聞くが、その多くは、「聖霊の私物化」に気づいていない。聖霊の本性は伝播性にある。主イエスは隠者でも、仙人でも、孤独者でもなかった。主はあらゆる階層に福音をもたらした。その主の霊である聖霊はキリスト者が、個のうちにとどまることを喜びたまわない。なぜなら、聖霊のはたらきは、最も「協働の賜物」として与えられるからである。

聖書は、これを「聖霊の一致」として明示している。教会の中には、いかに多くの人々が、聖霊経験の不たしかなために、悩んでいることである。パウロが、エペソ教会を訪ねたとき、開口一番、「あなたがたは、信仰にはいつた時に、聖霊を受けたのか」というコトバであった。日本アシュラムの使命もまた、この

発 行 所  
東京原町田  
東 江 古  
江 古 田  
編 者  
海 老 沢 高 瀬  
高 瀬 定 一

「地区アシュラムの手引」(50円)  
山可根式者  
「アシュラムの恵」(百円)

一点にあると思う。パークレ・バックストンが、いつでも、どこでも、かならず、「アナタは聖霊を受けましたか」と人々に声をかけた親ごころが、今にしてわかつてきたようである。ああ、遅きかな。

(中野バプテスタ教会・牧師)

### 最後のメッセージ

### 『不動の御国と』

### 不変の人格

### スタンレー・ジョーンズ

現代人は満たされない空虚の心を持っている。あらゆる知識をもちながら、悲しいかな「いかに生きるべきか」を知らない。その空虚を何を以て満たしたらよいのだろうか。過去五十年間の伝道の結果私に与えられた解答を紹介したい。皆様のものとを去るに当り二つのことを残して行きたい。第一は「不動の御国と不変の人格」。第二は「主にある神のしかりの成立」である。

実は一九三五年にソビエトを訪れた時にこのことを示された。そこでは神なき文明の建設をしていた。彼らは新世界を

熱意をこめてやっていた。クリスチャンにあの熱意に対抗するものがあろうかと思つた。モスクワのある朝、聖書を開き神に聞いた時、与えられたのは、ヘブル書十二章二八節で、私は「そんなに震われない国があるのか」と自問自答した。そして返ってきたのは「しかり唯一の不動の国はキリストの国、神の国である」というお答であった。

共産主義も揺り動く。その証拠に彼らは武力でその崩壊を防いでいる。資本主義も揺り動く。大統領が病気になるまで四億ドルの株が暴落した。現代は動揺のたえない世界である。しかし私はここで不動の御国を発見し、魂の渴きをもって聖書に帰って、更に「主イエス・キリストは昨日も今日もいつまでも変わらない」という御言をうけた。かくて私はこの二つを胸にとめて、ソビエトを去った。即ち「不動の御国」(絶対的秩序)と「不変の人」(絶対者)である。

更にこの二つは実は一つのことを現わしていることを発見した。主イエスは聖書の中で「私のために」と「御国のために」とを交互に用いておられる。事実、主は父なる神を現わされると同時に神の国をも具現されたお方である。私の信仰は個人的には一人の人格的絶対者と結びつき、同時に社会的に不動の御国とも関係を保つことになった。

個人的福音は魂であり、社会的福音は体に相当する。前者だけなら幽霊であり後者だけなら死体のようなものである。

この両者を備えた福音こそ必要である。個人的に神の前に悔改め、社会に対しても「悔改めて神の国に入れ」と叫ぶ必要がある。歴史家のH・G・ウエルズは「神の国」の思想に驚いて「これこそ人類史上最もラジカル(急進的)な思想である」と言った。なぜか。人間のどん欲と混乱に代って愛の秩序を立てようとするからである。私もこの神の国をどのような革命思想よりも革命的だと思ふ。

主イエスは「御国を来らせ給え」また「天になると地にもならせ給え」と祈るよう教えられた。神の国の到来は天におけるとく地上にも行われるようにということである。これは私たちの全体において神の御心への服従を求めることである。それでは全くの奴隷で自由がないと思う人があろう。しかしそうではない。天の全体主義に服従する時にこそ完全な自由が与えられるのである。

ナチス主義、ファシズム、共産主義など人間の作る全体主義に服従したら完全な奴隷になるだろうが、神の全体主義は人間に完全な自由を与える。神の国を受け入れ、そこに没入する時、天国を体験することが出来るからである。何とすばらしいことか。主イエス御自身がこの神の国の福音を宣教されたのである。神の国の福音以外を「私の福音」とは言われなかつた。現代はこの福音を求めている。しかし教界でもこの神の国を心の中で神秘的体験とか、末来の天国で体験できるものと解している。そのために信仰的に

### クリスチャン・

### アシュラムの守り方(二)

### ▽会の推進係

アシュラムは主イエスを頭として、その支配の下に集まり、言が肉体となって神の国の体験に入ることですから、主イエスの他に真の指導者はありません。しかし実際に会を運営し、推進していくためには、参加者一同の心が速やかに主イエスの指導の下に入れるように補佐する推進係が必要で、地区の委員長はそのような賜物を与えられていることが望ましいわけです。しかし委員長一人に限らず、各プログラムの司会、奨励を担当する委員、助言者もそのような能力を恵まれるよう祈りの準備が必要です。

地区主催でも数教会連合でも一教会のアシュラムでも、開催までに準備委員の回数多い祈りが積重ねられるほど、その参加者一同も速やかに、聖書と祈りの生活にとけこんでくるものです。

参加者には前以て十分な心の準備ができるように「アシュラムとは何か」を解説したものと、プログラムの主旨を送り、通信連絡を取ることが望ましいと思ひます。参加者は開会前に少くとも三分の余裕を以て会場に到着し、受付その他の手続きをすませ、心を静めて開会礼拝を待つように願ひ、特別事情のない限り、遅刻や早退をせず、終始、思いを一つにして唯、主イエスのお導きを受け神の国への忠誠へと高められるように祈り

### アシュラムの五大原則

(一) キリストの明確な

世界アシュラムの願語

『イエスは主である』



も空虚が生じてしまったのである。従って地上の全体主義者たちが「キリスト教は社会的理想は天国で実現する」と言うなら、地上はおれたちが占領しよう」と言うことになった。欧米はそのショックから未だに解放されてはいない。

神はこのようなショックを通して、もう一度神の福音に立ち帰ることを求めておられる。神の国を発見する時、全世界にリバイバルが起るであろう。

現代人は絶対的なものを失い、相対主義に悩んでいる。造反が起り反抗しているが、反抗することは知っていても、何に向うて反抗すべきかを知らない。今こそ目覚めて、「神の国こそ求むべきものであった」と悟る時ではないか。

(一九七一年十一月、共立講堂にて)

ジョーンズ博士はその年彼の第十回日本伝道と八ヶ所でのアシュラムに奉仕して愈々帰米される最後の日、十一月三十日夜に二千人の会衆を前に以上の遺言的説教をされた。

帰宅の途上オクラホマのアシュラムで夜半に発病、再起不能と診断されたが、一同の篤い祈りの結果、翌七二年夏には第一回世界アシュラムをエルサルムで開催され、インドに渡り数ヶ月を静養と伝道に遇されたが、七三年一月遂に愛するインドで生涯の幕を閉じられた。時に八十九才であった。御召天三周年を記念して、ここに掲載する。熟読されたい。

(E)

各地だより

関東アシュラム (14回)

去十月九日より二泊三日間 奥多摩福音の家にて

地区委員会は一月から毎月一回集まって、深い祈りと準備の打合せ、仕事の分担、地区全体の各教派教会への働きかけを進めて開催の日を迎えた。その結果八十二名の参加申込あり、各自が例年にまさる強いニードを以て出席した。奥多摩の深い緑に包まれた会場も例年とはちがって心を洗ってくれるようであった。参加者の約半数が初めてということ、毎年開催の必要性を感じる。

今回は主題「聖霊における喜び」を聖書ロマ書十四章十七節から与えられ、開会礼拝(中村武) 開心(横山義孝) に続いて三日間に「み言葉に学ぶ時」を持ち「聖霊による明渡し」(岡田実) 「聖霊による改変」(帆足誠) 「聖霊による働き」(岡田) 「聖霊による証し」(海老沢宜道) 「聖霊による充満」(中村) という順に進められた。七つの分団ではそれらを受けて、更に内容的に深められ毎朝の静聴の時(海老沢)には使徒行伝の一章から六章までによって、主の御声を聴いた。結果は各分団から一名宛、計七名の立証者が「アシュラムの恵み」をよく証しされ、最後の「充満の時」には全員が新しい決断を表明して立上った。尚労作の時には福音の家内外の大掃除をした他、最後の朝に「医しの時」(高瀬恒

徳)を持って、心と体と魂の医しを求めて前に進み出た多くの人々に熱い祈りがふり注がれ一同は感涙にむせんだ。「信仰の立直しができた。主イエス様と出会った。伝道の熱意が与えられた。真剣に悔改めた罪のゆるしを体験した。」などと感謝が述べられ。この日の恵みをしっかりと持統して、再び一年後に集まることを互に約束して各教会へ帰って行った。今年の地区委員は(長)横山(書記)中村(会計)井本富三郎の他、委員として、海老沢、岡田、大久保進、萱沼孝文、河合光治、菊池、栗山植子、武井啓治、高瀬恒徳、帆足、松田、満丸茂、山根可式、渡辺晋、淵江淳一の計十八名が協力奉仕した。尚、長く会計としてよき奉仕をされた成毛謙次郎氏が急逝されファミリーアワーで追悼会を守った。

関西アシュラム (10回)

去十一月三日—二日 千里山のシオンロッジにて

京都神の各委員が度々集まって中路委員長の指導の下、祈りと協議を重ねて、プログラムを組み、後宮実行委員長以下土山、平方、西条、辻中、杉田、金、渡部その他の協力を得、十八教会から四二名の参加者を迎えて開催した。

今回の標語は「目をさまして感謝のうち祈り、ひたすら祈り続けなさい」(コロサイ書四章二節)を与えられ、一同折椅の生活を徹底できるように、主イエスの御導きを仰いだ。参加者の数は予定

(四) 神の国の征服と神道 (五) 教会への奉仕と伝道

求めて頂きたいものです。推進係(委員一同)は、各プログラムの運び方について前以て十分の打合せをして置くことが大切です。一人の有力な人間に全体の指導を一任する場合は、その人の思い通りに進められますが、連合体主催の場合は、準備委員がその回の主旨を理解し、祈りの目標を明確につかんでいないと途中で他の司会者や補佐役の運び方について異なった意見や感情を持つたりして、全体の霊気を妨げる危険がありますから、十分に注意して頂きたいものです。できればお互いに人間的な批判をさけ、一切を主の御霊の御導きに委ねることです。

参加者一同は(その時間の担当者以外の委員も助言者も含めて)ひたすら心をその時に与えられる主イエスの導きに集中すべきですから、会場の内外で何が起るうとも気にかげず、また心配せず、時間の経過も忘れてしまうほどになることが望ましいのです。

常に新しい参加者があるために、いつも会の運営とか精神についての説明が各地でなされているようですが、「アシュラムとは何か」を知っただけでは、アシュラムの目的は達成されません。アシュラムで説かれ勧められる「己をすて」も「明け渡し」も「われに聴け」もその他一切は聖書にあり、二千年間教会が教えてきたことばかりです。アシュラムではその御言を実際に体験する所に感謝と喜びが満ち溢れてくるのです。

より少なかったが、内容は素晴らしいものであった。

会計状況は前年度の繰越金教会分担金、参加者会費、席上献金などによって金三六万円が出来、全ての経費をまかない、連盟分担金五万円を送ってなお十数万円の繰越が残るといふ誠に感謝の至りであった。

### 東京城北アシュラム(5回)

十一月二三日—二四日

新宿区下落合、池ノ上教会にて

既報の如く同教会の献堂五周年の祝賀を兼ねて、日曜礼拝(説教、高瀬恒徳)に続き、四教会共催のもとに第五回の城北アシュラムを開いた。午後は開心の時(山根可弑)に初まり五十名の参加者が明渡しを表明、祈求の時(四分団)にはそれぞれ求めを述べて共に祈り、恵みの時(大久保進)にはヨハネ伝十四章の「道と真理と命なる主イエス」が示され夕食後、立証の時(岡田実)には「聖霊の実を結べ」とのメッセージあり、夜九時閉会、翌二四日参加者が六十名に増加十時半の「静聴の時」(海老沢宣道)にはガラテヤ書五章と六章を黙想して主の御声を聴くように導かれ、主イエスの御臨在を実感した者多く霊感堂に満ちた。中食後「恵みの時」(大久保)には「イエスは主である」の意義を明らかにされ再び「祈求の時」(四分団)を持ち互に受けた恵みの分ち合いをして共に祈る。いよゝ靈潮高まって最後の「充滿の時

(海老沢)には全員が感謝と決意を表明、御栄光をさんびしつつ散会した。

### 江古田の一日退修会

十一月九日(日) 朝拝から夕刻まで

東京都中野区江原町の江古田教会

一教会のミニ・アシュラムであったが朝拝の準備祈禱会に初まり、礼拝説教は高瀬恒徳師を迎え、「僕のかたちをとり」と題して同、祈りの焦点を示され午後「静聴の時」(海老沢)には一同、ビリビ書一〜三章を静まって黙想し、主の御声を聴くすべを教えられた。「祈の細胞」(四分団)で、各自のニードの恵みを分か合い祈の互助をした。最後の充滿の時には再び高瀬師の奨励「おのれを空うし」を更に徹底的に導かれ、全員一同の決断表明がなされた。「主よ終まで仕えまらん」を唱和したものの四六名であった。

### 予告

#### 東京・城北アシュラム(6回)

二月十一日(水) 九時半〜四時半

新宿区西大久保一ノ四三五

新宿西教会(社会保険会館隣)

主題「聖霊による革新」

みことば(テトス書三章四〜六節)

助言者・海老沢宣道(江古田教会)

山根 可弑(池の上教会)

大久保 進(中野バプ教会)

岡田 実(新宿西教会)

新年を迎え、決意すべきことは多くあ

るが、まず聖霊による革新を与えられなければ、何も進展しないであろう。僅か一日のアシュラムであるが、今日の世界と教界のために共に祈る同志の多数参加されんことを希望している。

参加費・千円(会費と中食代)

### 第五回全国理事会

二年ぶりに全国各地代表(三役)が一室に会して、今後の日本アシュラム運動につき深い祈りと打合せをします。主

に在る兄弟の御加禱を願います。

三月八日(月) 午後から九日(火) 正

午まで、東京目黒みやこ荘にて

議題・役員改選、事業及会計報告、現

地報告、向う二年間の計画その他。

創始者ジョーンズ博士記念

### 三大事業への献金募集中

いよいよ三月末で、切

故博士が生前希望された世界アシュラ

ム・センターをガリラヤ湖畔に建設する

仕事など三大事業のため米国で六〇万ド

ルを募集中、日本連盟八地区もこれに賛

成して目標一百万ドルを捧げることにして

いる。ぜひ有志の御協力を!

### 記念事業の献金報告

第十回(七五年十月〜七六年一月)

▼五万円 中部地区アシュラム

▼四万円 東北地区アシュラム(二回分)

▼一万円 村上 東(東北・郡山)

成毛 健郎(関東、池ノ上)

▼一万円 川名 はる(関東・新宿西)

大谷 松枝(〃・青梅バプ)

一麦 教会(中部・名古屋)

▼七千円 千葉 久江(関東・平塚)

高橋 みち(関東・ニコライ)

石踊 蓉子(〃・中野バプ)

中沢 敏子(〃・相模原)

▼三千元 西村 安子(〃・川崎)

南部 ヨシ(東北・盛岡)

青木 岩多(関東・長岡)

三室 泰平(〃・早稲田)

桜岡 愛子(〃・経堂北)

▼二千元 鈴木 清光(中部・豊山)

▼一千元 福田功、野々村信雄(関東)

佐々木雄次(道南)、土山牧羔(関西)

古賀丞(関東)

小計(二四件) 金一九二、〇〇〇円

累計 金二、二八八、八〇〇円也

### ◆連盟を支える力

(七五年十月〜七六年一月迄の地区分担金と個人有志の賛助献金左の通り)

▼五万円 関西地区委員会(七五年度)

▼二万円 関東地区委員会(〃)

▼二万円 道南地区委員会(〃)

▼一万円 大谷 松枝(関東・青梅バプ)

▼五千元 寺井 俊健(〃・耳公会)

▼三千元 沢田 赴(〃・大森めぐみ)

▼二千元 千葉 久江(〃・平塚)

▼二千元 三室 泰平(関東・早稲田)

菅 宏(〃・小金井)

▼一千元 桜岡 愛子(〃・経堂北)

▼一千元 大久保進、西原孝子、白石万

亀子(以上関東)、齊藤ミトシ(道南)

土山牧羔(関西)

▼アシュラムとは故スタンレー・ジョーンズ博士がインドの退修方式を取り入れ

所 区 12 村 道 徳 50円

参加者が何度でも読むべきもの「アシュラムとは何か」(50円)